

新潟を離れて

伊藤俊方*

はじめに

新潟応用地質研究会には、公私ともに多大なお世話になり感謝している。編集担当副幹事長という大役を引き受けながら、わずか1年余りで新潟を離れることになったのはまことに心苦しいところであり、また残念にも思っている。私が「新潟を離れて」と題してペンをとるのは実はこれが2回目であり、昭和59年に新潟から金沢へ転勤したときにも、稚拙な文章を書いている。あれからもう既に19年になろうとしており、歳月の過ぎ行くさまにとまどいを感じている。さらに今回、新潟から東京に出てきて早くも季節が一巡し、再びうっとうしい梅雨を迎えようとしている。ようやく東京の生活にも慣れてきたので、新潟の思い出や近況などを報告しておきたい。

新潟応用地質研究会のこと

私が新潟応用地質研究会の幹事に参画したのは平成7年からであり、編集を担当することになった。当時の幹事長は山岸さんで編集担当副幹事長は大谷さん、編集長は古川さんであった。編集会議は会誌の発行までに3回程度開催される。巻頭言や特別講演、研究発表などに関するものは、幹事会で方針が決めるので、編集部会では原稿依頼や回収、共立印刷さんとの打ち合わせ連絡、校正、配布等が中心となる。最も苦心するところは、会員からの投稿が少ないことである。そのため幹事を通じて、特定の候補者に寄稿をお願いしている状況にある。

会誌の配布にも苦勞がある。配布はこれまで国土防災技術の小嶋さんの所で一手に引き受けていただいている。常に最新の会員名簿に、転勤などによる異動が反映されていないことが多い。企業などに属していない個人会員へは、直接送付しているが、企業に属している会員の分は会社ごとに受け取りに行っていた。以前は会場にて会社ごとに参加されなかった会員の分を渡していたが、その場での集計が困難であり、後日受け渡しということになっている。会誌の送料やその手間を考えると、できるだけ多くの方々に例会に参加していただきたいと思う。

編集のことを離れて振り返ってみると、この会での思い出は楽しいことばかりである。近年では幹事の増員で若い人が多くなり、会の運営の原動力になっていただいているが、いろいろな人と仕事を離れてひとつのことを行うのはこの会の楽しみでもある。

幹事会は災害研で行なわれることが多いが、例会は興和ビルと技術士センタービルで交互に行うことにしている。秋の現地見学会は予算のこともあって、技術士会北陸支部と地盤工学会北陸支部との共催で行われる事が多い。例会や見学会後の意見交換会では、産官学の立場を離れて酒を酌み交わし仲間の輪を広げていく、そんな雰囲気が好きであった。

*株式会社日さく

新潟での仕事

私が新潟の地に来たのは、昭和49年3月末のことである。南国高知の大学を卒業し、埼玉の実家から、当時のL特急「とき」に揺られること4時間、国境の長いトンネルを越えるとそこは雪国であった、という小説の世界さながらに、えらいところへ来たものだと不安と希望の入り混じった社会生活の始まりであった。

会社の事務所はまだ古町3にあり、県庁が今の市役所の場所にあって近かった。そのうち事務所は中木戸（現上木戸）の社有地に移転した。鳥屋野の独身寮からマイカー通勤が始まった。その頃から市内を走る車の数が急激に多くなったように思う。既に2車線の新潟バイパスが出来ており、先見性のある街だという印象を持った。

当時の仕事は東北6県と北信越5県の管轄のうち、新潟の一部と金沢を中心とする北陸を担当した。したがって、年間およそ200日もの金沢に出張する日々が続いた。JRの「雷鳥」や「北越」などは現在より本数が多く、今よりは便が良かった。

仕事の内容は主に地すべり調査であった。新潟の泥岩系の地すべりに対して、北陸の特に能登の地すべりは砂岩系が多いという印象がある。当時北陸で8件の地すべりを担当していたが、徐々に概成となり、最後に残って平成の初期まで続いた小矢部市の「峠地すべり」は私のライフワークといってよい。もうひとつのライフワークに榊谷ダムがある。以前にこの会誌に書いたことがあるが、榊谷ダムは北陸農政局が福井県南条郡今庄町に建設中の堤高100mのロックフィルダムである。この規模としてはおそらく最後のロックフィルダムであろうとされている。昭和50年から計画段階の調査が始まり、昭和55年の全計調査を経て、昭和59年から実施設計の調査が始まった。それとともに私は新潟から金沢に転勤し、対応することとなった。

金沢営業所の頃

その頃、念願の新潟市営中山住宅に当選して入居したばかりであり、後ろ髪が惹かれる思いであったが、生後6ヶ月の長男とともに家族で金沢に移り住んだ。金沢は観光都市であり、また加賀百万石の伝統が根付いているのか、家内によると物価が高く地元意識が旺盛な土地柄である。我々転勤族はなかなか地元とは打ち解けず、転勤族同士の近所付き合いであった。金沢では当時新潟応用地質研究会のような技術者の集まりがなかったのが残念であった。北陸地盤工学会が発足したのはもう少し後のことである。

金沢は古い街であり、市内各所に名所旧跡があつて、また郊外にも観光スポットが多い。休日には家族でいろいろなところへ出かけていったが、新潟に帰ってからはほとんど行く場所がないのが残念であった。

平成元年4月に金沢から新潟に帰ることになった。当社も家を買おうと転勤になるというジグクスがあるが、それならば転勤して家を買うのもいいだろうと思ひ立った。できれば会社の近郊の東新潟地区が良いと思う反面、子どもの教育を考えると西新潟かな、などと悩みながらも会社のそばに決めた。

新潟での温泉開発

新潟へ帰ってからの私の仕事は、当時ブームになっていた温泉開発に伴う調査であった。転勤まもなく、本社に導入した車載型ガンマ線断裂系探査を六日町五十沢や湯之谷村銀山平で実施したのを皮切りに、新潟県内のいくつかの市町村で行った。平成3年には電磁探査（CSAMT）を導入し、それ以後はこの2種類の物理探査を中心に温泉開発調査を実施している。主な担当現場は、関川村（道の駅）、五泉市（馬下）、田上町（護摩堂山）、下田村（八木鼻）、柏崎市（海岸温泉）、安塚町（須川）などである。温泉の開発深度は、技術の向上などにより以前は200～500mであったものが、昭和50年代後半に800～1000m、平成に入ると1000～1200m、平成10年頃では1300～1500m級へと次第に深くなって行った。しかしバブル経済の崩壊とともに平成7～8年頃をピークとして温泉開発の仕事は急激に減少した。これに追い討ちをかけるように、温泉開発はあたかも博打であるという成功報酬型温泉開発が全国的に広がり、この業界の社会に対する権威や地位、あるいは応用地質的学術観などが著しく低下したのが残念である。

海外研修

この頃、海外に行く機会が増えた。それらは次の通りである。

平成5年9月：第7回国際地すべり研究会議（7th ICFL）～チェコ・スロヴァキア～
私の海外初体験、しかもプラハの某ホテルに現地集合・現地解散

「チェコ」と「スロヴァキア」が分離独立した直後の訪問

移動速度の極めて遅い地すべりや古城の建つ岩山のクリープ変位など視察

平成8年2月：インドネシアへ砂防視察、対外協（新潟県対外科学技術交流協会）主催
新潟県砂防課、ジョグジャカルタのSTC（Sabo Technical Center）表敬訪問、
JICA出向中の平野さん慰労、メラピ火山砂防視察、寺院遺跡修復見学

平成9年7月：東北アジア地すべり土石流シンポジウム（西安）・三峡ダム、
地すべり学会主催、西安近郊の華清池地すべり・兵馬傭見学、三峡ダム建設現場
船上から視察、貯水池内揚子江兩岸の地すべり地見学

平成9年11月：日韓技術士会議（ソウル）、技術士会北陸支部の一員として参加
ソウルの玄関口となる仁川の国際空港建設現場などを見学、干満差8m

平成12年4月：ネパールの旅、カトマンズから新潟大学災害研へ留学にきているチワリ
さんの一時帰国にあわせて有志15名参加、チワリさん行きつけの店「タージマ
ホール」の客つながら、ポカラの北ジョムソンからカリガンダキ川に沿って果て
しなく続く大露頭、カトマンズの寺院、エベレストの遊覧飛行

平成12年6月：台湾921集集地震災害視察、対外協主催、地震断層、王文能氏の案内

以上が私の主な海外記録であるが、振り返ってみるとすべて応用地質に関することばかりであり、これも新潟にいたからこそ実現できたものと感謝している。なおこれらの見学記録はすべて小冊子にしてあり、主なものは対外協事務局に寄贈してあるので、興味のある

る方は訪ねてみてほしい。

学会協会活動

社内の異動により、水谷・白石が相次いで転勤した後、学会協会の幹事は私が一手に引き受けることになった。主なものを列挙すると次の通りである。

新潟応用地質研究会（編集幹事、のち副幹事長）、新潟県地質調査業協会（技術委員、地質調査技士登録更新講習講師）、地すべり対策技術協会（技術研修委員、のち柿崎さんの後任として委員長、新潟の地すべり'98編集委員）、地すべり学会新潟支部（幹事、'98地すべり学会全国大会）、技術士会北陸支部（“ほくりくの技術士”編集担当、技術士会新潟大会）、地盤工学会北陸支部（監査）。

これらの委員会や幹事会では、私の好き勝手にさせていただいて感謝しているとともに、それぞれの幹事の方々や会社には迷惑をかけたことを反省している。

東京にて

東京支店の事務所はJR京浜東北線の王子にある。王子は北区役所がある街で、新潟県と縁のある町でもある。また洋紙発祥の地であり、紙の博物館は首都高中央環状線工事のため、飛鳥山公園に移転した。会社の事務所は駅の東側にあたり、下町の雰囲気がまだ残っている静かな工場住宅街である。私の住まいである社宅は、地下鉄南北線で王子から5駅目の南鳩ヶ谷にある。この地下鉄は赤羽岩淵駅以北の埼玉高速鉄道線と直結しており、終点は浦和スタジアムのある浦和美園駅である。現在ワールドカップで大混雑しているが、昨年3月の開通時には料金が高額のため利用者には敬遠されていたという。朝の通勤では1年前は座れたが今では座れない。支店事務所が6月14日に大宮へ移転することとなり、この地下鉄を利用することは少なくなるであろう。

おわりに

新潟応用地質研究会は産官学の技術者が一同に会し、情報交換を行える場として、また酒を酌み交わして職場のストレスを解消できる、数少ない社交場である。このような集まりが30年以上の長きにわたり維持継続されているのも、新潟ならではのことに感じている。おわりに、今後の新潟応用地質研究会のますますの盛会を祈念している。